

[論文]

地域開発と地方都市圏の変容 — 海橋のまち坂出都市圏を事例として —

奥 田 憲 昭

は じ め に

高度経済成長期に入った昭和37年、政府は大都市と地方の地域間格差是正と均衡ある発展を目指して全国総合開発計画を策定した。池田内閣時代に始まったこの全国総合開発計画の目標年次は昭和45年であったが、その後、昭和44年に第2次、昭和52年に第3次、昭和62年に第4次、平成10年に第5次の総合開発計画が策定された。

本研究の研究対象とする香川県坂出市に立地している番の州臨海工業地帯は、第一次全国総合開発計画と密接な関係を持ち、瀬戸大橋は第二次全国総合開発計画において建設が明記された。第一次全国総合開発計画で謳われた拠点開発方式を実現するため昭和37年に新産業都市建設促進法が制定された。44県が競って建設基本計画を策定し、香川県は番の州臨海工業地帯建設基本計画を策定して新産業都市の指定を求めた。その結果、昭和39年から41年にかけて全国15地区が指定されたが、番の州臨海工業地帯建設基本計画は選に洩れて指定されなかった。しかし、対岸の岡山県南（水島工業地帯）の指定や船舶の大型化などから備讃瀬戸の浚渫が必要となり、その浚渫土砂の有効利用のため番の州開発が脚光を浴び、香川県は昭和39年から昭和50年にかけて事業費140億を出資して番の州臨海工業地帯を造成した¹⁾。この番の州臨海工業地帯建設基本

1) この間の事情については奥田憲昭著『現代地方都市論—海橋のまち坂出市と住民生活—』恒星社恒星閣35頁に詳しい。

(2) 地方開発と地方都市圏の変容

計画は、番の州と呼ばれていた坂出市沖合に広がる浅瀬を埋め立てて沙弥島と瀬居島まで陸続きにして広大な工業用地を造成し、臨海コンビナートを形成しようという計画であった。工業用地造成は急ピッチで進められ、60万トンの造船ドックをもつ川崎重工業坂出造船所、コークス・アルミ材を製造する三菱化成工業、火力発電所の四国電力、石油精製のアジア共石、アルミ建材の吉田工業が順次進出し、昭和44年には一大コンビナートが形成された²⁾。

第二次全国総合開発計画において建設が明記された瀬戸大橋についてはその決定までには長い政治的過程があった³⁾。当初政府は本州四国連絡橋について1ルートの架橋を予定していたが、国会議員を動員して競い合う児島・坂出ルート、明石・鳴門ルート、尾道・今治ルートの一本化ができず、昭和45年5月に佐藤内閣は、本州四国連絡橋公団を新設して3ルートとも同時着工することを発表し、政治決着を図った。そして、同年7月、本州四国連絡橋公団が発足し、神戸・児島・尾道に調査事務所が開設された。しかし、その後オイルショックによる高度経済成長の終焉もあり、昭和50年8月に政府は、「本四連絡橋は、当面鉄道併用橋1ルートとして第3次全国総合開発計画において決定する」とした。そして、昭和52年4月、政府は当面早期完成を図るルートを道路・鉄道併用橋の児島・坂出ルート（瀬戸大橋）にすることを正式決定した。

昭和53年10月10日、瀬戸大橋の起工式が挙行され、ほぼ10年後の昭和63年4月10日に開通式が盛大に挙行された。開通時の坂出市民の熱い期待は、前日に「はばたけ坂出'88」市民運動推進協議会によって挙行された「ちょうちんパレード」や坂出市民への公募によって決められた「夢無限 海橋のまち 坂出」といった標語によく表れている⁴⁾。

以来20年以上の歳月が過ぎた。四国側の架橋地点となった香川県坂出市やそ

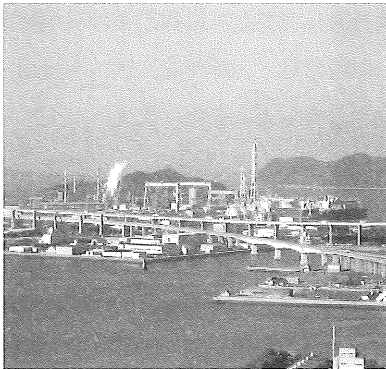
2) 番の州工業地帯については前掲書 36-45頁。

3) 瀬戸大橋の政治過程の詳細は前掲書 第6章。

4) この標語は、現在も坂出市庁舎正面玄関入り口の石碑に刻まれている。

の周辺地域はどのように変化したであろうか。本研究は、瀬戸大橋架橋後約20年間に香川県側の架橋地点となった坂出市と坂出市に隣接する宇多津町、旧飯山町、旧丸亀市⁵⁾からなる坂出都市圏⁶⁾がどのように変化したかを、国勢調査報告や人口移動調査報告書などに基づく人口分析により明らかにし、その変化の原因について考察することを目的としている。坂出市、宇多津町、旧飯山町、旧丸亀市を坂出都市圏とするのは、後に明らかにするとおり、宇多津町、旧飯山町、旧丸亀市から坂出市への通勤者が多く、これら隣接市町は坂出市の臨海工業地帯への通勤圏として強い一体性を保持しているためである⁷⁾。

番の州工業地帯



奥田撮影

瀬戸大橋と瀬戸大橋記念公園



出所) 瀬戸大橋記念公園Website

5) 旧丸亀市は平成17年4月に旧飯山町、旧綾歌町と合併して丸亀市となった。

なお、本論文では合併前の段階に関連する場合は旧をつけることとする。

6) 香川県の都市計画においては、都市圏にもとづいて都市計画区域を定めるとし、坂出都市計画区域、丸亀広域都市計画区域に分け、丸亀広域都市計画区域に宇多津町を入れている。しかし、宇多津町が丸亀広域都市圏に入る根拠はなにも示されていない。

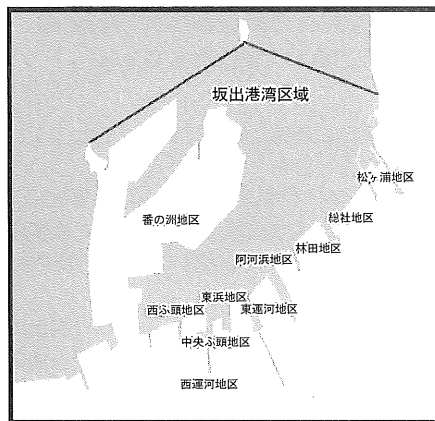
7) かつて旧綾歌町は坂出市とともに綾歌郡に属していた。しかし、今日では坂出市への通勤者は比較的少ないことから坂出都市圏から除外する。しかし、瀬戸大橋開通後、旧綾歌町に大型観光施設（レオマワールド）が設置され瀬戸大橋と強い結びつきをもっていること、さらに旧綾歌町は旧飯山町とともに旧丸亀市と合併し丸亀市になったことからここでの統計分析対象に入れることとした。

(4) 地方開発と地方都市圏の変容

1. 坂出都市圏（坂出市・宇多津町・旧飯山町・旧丸亀市）の概要

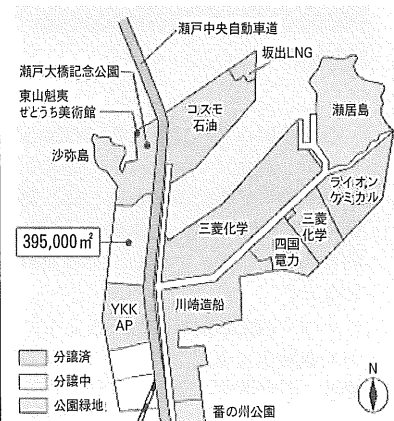
坂出市，宇多津町，旧飯山町，旧丸亀市の概要は以下のとおりである。平成22年4月1日現在の坂出市の人口は57,361人となっている。坂出市は塩田の町，工業都市，港湾都市として発達してきた。江戸時代，高松藩が坂出に大規模な塩田を開拓したのが坂出市発展の基礎となった。明治30年には讃岐紡績が設立され，大正7年に倉敷紡績となったことにより工場規模が拡大し，坂出市は塩田の町から次第に工業都市としての性格を強めることとなった。大正から昭和にかけて港湾開発が進み，讃岐の麦を製粉する日清製粉坂出工場や石灰・肥料・油脂などを生産する化学工場が臨海部に立地し，臨海工業地帯が形成されていった。番の州工業地帯には現在，川崎造船，三菱化成，コスモ石油，四国電力，YKK，ライオンケミカルが立地している。また，坂出市の沿岸部に広がっていた流下式塩田は，塩の製造法がイオン交換膜製塩法による工場生産に変化したことにより昭和45年頃には全面的に廃止された。跡地は工業用地や住宅地として整備され，工業用地には物流関係の企業が多く立地している。

坂出港湾区域



出所) 坂出市ホームページ

番の洲工業地帯と立地企業



出所) 香川県ホームページ

坂出港は昭和26年より重要港湾に指定され、四国における国際流通拠点として重要な役割を果たしている。平成21年の外航船の総隻数は380隻、内航船の総隻数は13,849隻である。外貨物の主な輸出品は、コークス（インド70.0%）、石油製品（オーストラリア79.2%）、金属くず（中国52.1%、韓国47.9%）、化学薬品（中国100.0%）などとなっており、主な輸入品は原油（アラブ首長国23.3%、イラン23.0%、カタール17.1%、サウジアラビア16.9%、クウェート16.5%、オマーン3.2%）、石炭（オーストラリア79.3%、L P G（サウジアラビア73.6%）、麦（オーストラリア86.6%）などとなっている⁸⁾。

昭和63年4月1日に道路・鉄道の併用橋である瀬戸大橋が完成し、坂出市には坂出 I C、坂出北 I C、与島パーキングエリアが設置された。坂出 I C は四国横断自動車道及び国道11号線に接続している。国道11号線は瀬戸大橋の開通に合わせて設置されたもので、それまでの国道11号線は県道33号線となった。旧国道は片側一車線の対面交通で通勤時には著しい渋滞が生じていたが、新しい国道11号線は片側2車線で坂出－丸亀間の時間距離を大幅に短縮することとなった。

旧国道11号線⁹⁾（県道33号線）

国道11号線



8) 坂出市ホームページ。

9) 写真はすべて奥田が撮影。

(6) 地方開発と地方都市圏の変容

瀬戸大橋は、下津井瀬戸大橋、櫃石島橋、岩黒島橋、与島橋、北備讃瀬戸大橋、南備讃瀬戸大橋の6橋からなっており、倉敷市に位置する下津井瀬戸大橋以外は坂出市に位置している。鉄道は岡山方面から瀬戸大橋を渡り終えると坂出・高松方面と宇多津・丸亀方面に分岐している。坂出駅・宇多津駅はともに四国の玄関駅となっているが、岡山―坂出―高松間は快速マリンライナーが上り・下りとも1時間毎に走行している。

宇多津町の人口は18,178人（平成22年4月1日）である。旧市街地には、四国八十八ヶ寺霊場の一つ郷照寺など11の寺社があり、往時を偲ばせる古い町並みが残っている。製塩業に従事する人も多かったが、昭和47年に沿岸の塩田は閉鎖された。昭和53年から塩田跡地に地域振興整備公団による新都市建設が進められ、平成3年に竣工した。新都市地域の中心部には松山・高知方面に向かう急行列車が停車する宇多津駅が移転して新設され、周辺にはホテル、大型商業施設、マンション、大学、アミューズメント施設などが立地している。

平成22年10月1日における丸亀市の人口は110,767人となっている。平成17年3月22日に旧飯山町、旧綾歌町と合併し、新しい丸亀市となった。古くは金刀比羅宮の参道口として市街地が形成され、1602年（慶長7年）に生駒氏が丸亀城を築城してからは城下町として発展した。現在、丸亀城の大手門前には市役所・警察署・消防署・市民会館・税務署・高松地方裁判所・法務局丸亀支局・労働基準監督署などが立地する官庁街が広がり、周辺の堀に面して公立、私立の有名進学高校が立地して文教地区となっている。

旧丸亀市と合併した旧飯山町は讃岐富士の麓に広がる田園地帯であったが、番の洲工業地帯が形成されてからは川崎重工の団地造成や一般向けの宅地造成が進み、人口が大幅に増加した。旧飯山町とともに旧丸亀市と合併した旧綾歌町は旧飯山町からさらに山手に広がる田園地帯である。瀬戸大橋が開通して3年後の1991年4月に西日本最大規模のテーマパーク「レオマワールド」がオープンした。オープン初年度の入園数は239万人を記録した。しかし、翌年から

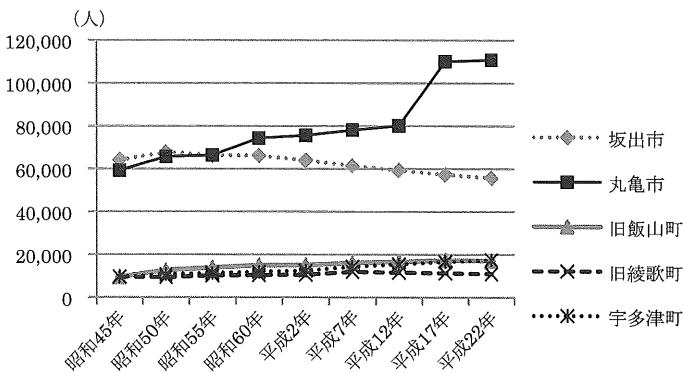
は下落の一途を辿り、平成12年9月に閉鎖に追い込まれた¹⁰⁾。そして10年後の平成22年7月、地元企業を中心に4社が母体となって経営するニューレオマワールドが再びオープンした。

2. 坂出都市圏の拡大と空洞化現象

1) 夜間人口の推移

図1と図2は、坂出都市圏の人口推移を示したものである。坂出市は昭和50年の67,624人をピークに減少し続け、平成22年10月においては55,631人（国勢調査速報）にまで減少した。昭和47年から昭和51年にかけては、第1次オイルショックにより景気が大きく後退したにもかかわらず、人口は増加した。しかし、昭和51年から減少傾向が顕著となり、その後瀬戸大橋工事が佳境に入った昭和57年から61年にかけて減少傾向が止まったものの、瀬戸大橋が開通する直前からは再び減少の一途を辿ることとなった。

図1 坂出都市圏の人口推移

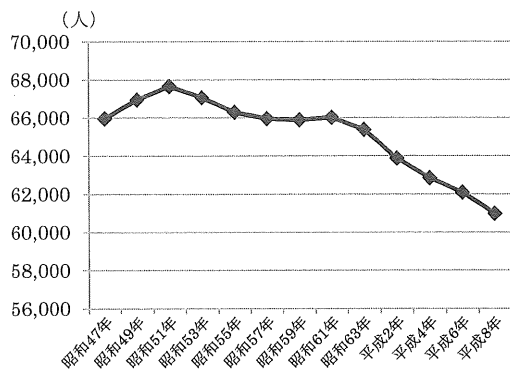


注：総務庁統計局「国勢調査報告」（平成22年は速報）により作成

10) 四国新聞社「どう変わるニューレオマ」ホームページ 追跡シリーズ2010/5/30

(8) 地方開発と地方都市圏の変容

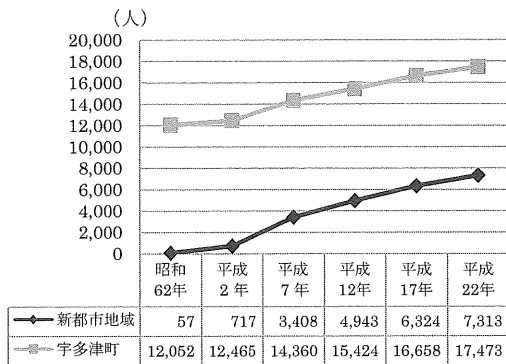
図2 瀬戸大橋架橋前後の坂出市の人口推移



注：坂出市統計書により作成

これに対して、坂出市に隣接する宇多津町と旧丸亀市では昭和45年から今日まで人口増加傾向が続いている。なかでも、宇多津町は新都市が完成した昭和62年頃から人口増加が目立つようになり、昭和60年に11,864人であった人口が平成22年10月には18,429人（国勢調査速報）にまで増加した。新都市地域の人口は昭和62年においてはわずか57人であったが、平成2年以降急増し、平成22年には7,313人となった（図3）。

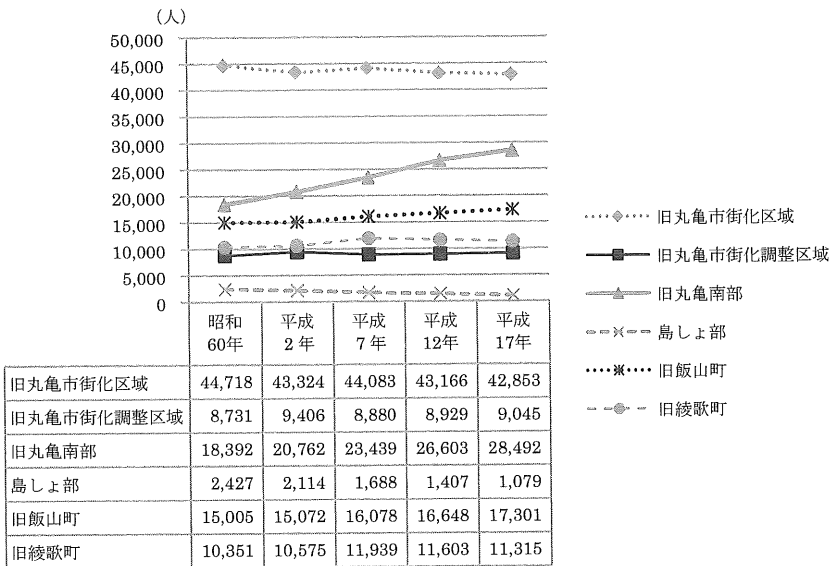
図3 宇多津町の人口推移



注：各年とも住民基本台帳（昭和62年は4月7日、平成2年・7年は4月6日、平成12・17・22年は3月31日）により作成。

一方、旧丸亀市では昭和45年には59,214人であったが、昭和55年国勢調査では70,840人と7万人を超えて坂出市の人口を上回り、平成17年には市町村合併により10万都市となった。平成22年10月には110,446人にまで増加した¹¹⁾。また、旧飯山町の人口は、番の州工業地帯が形成された昭和45年(9,518人)から昭和60年(15,005人)にかけて急増し、以後も合併する平成17年までは増加傾向を持続していた(図4)。

図4 旧丸亀市、旧飯山町の人口推移



注：丸亀市都市計画マスタープラン（人口は国勢調査報告による）により作成

2) 坂出都市圏の人口動態

行政都市の人口増減は、自然増減と社会増減によって決定する。図5は坂出

11) 平成22年国勢調査速報による。

(10) 地方開発と地方都市圏の変容

都市圏の市と町の自然増減率¹²⁾の推移を、図6は出生率の推移を、図7は高齢化率の推移を示している。これらにより次のような点が指摘される。

坂出市の自然増減率は、昭和60年においては3.7‰の増加であったが、平成2年からは減少傾向となり、以後自然減少が続いている。減少率も平成17年－3.9‰、平成20年－4.0‰と年々高くなってきている。これは、少子高齢化が進行した結果である。図6は坂出市の出生率¹³⁾の推移を示したものである。昭和60年に出生率は10.7‰であったが、10年後の平成7年には8.1‰と旧飯山町よりも低くなり、平成20年には7.3‰まで低下している。坂出市の高齢化率は図7にあるとおり、昭和60年時点では14.1%と旧丸亀市との差は1.0%程度であったが、若い世代の転出により急激に高齢化が進行し、平成12年の時点においては23.6%と坂出都市圏の市町のなかでは最も高く、宇多津町よりも9.0%、旧飯山町よりも5.8%、旧丸亀市よりも4.5%、旧綾歌町よりも0.6%高くなっていた。平成17年においては26.3%に達し、住民基本台帳に基づくと平成22年10月1日における高齢化率は28.2%に達した。

宇多津町の自然増加率は昭和60年以降高い増加率を維持している。しかし、平成7年の11.4‰をピークとして増加率は徐々に減少してきており、平成21年は5.6‰となっている。宇多津市の高い自然増加率は、宇多津新都市建設によりマンションや一戸建て住宅が増え、若い家族が転入してきたことによるものである。ただ、平成12年以降は、自然増の率が徐々に減少してきている。平成7年の宇多津町における出生率は18.9‰まで上昇した。その後低下したが、それでも平成20年の出生率は11.9‰と高くなっている。一方、平成17年における宇多津町の高齢化率は15.3%に止まっている。

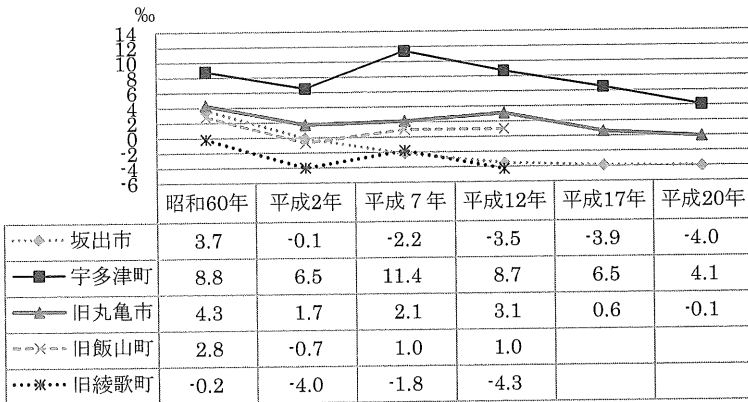
12) 自然増減率、社会増減率は年間人口動態を基に算出しており、率はすべて千分率(‰パーミル)で表記している。計算式は自然増減率(‰)＝1年間の自然増減数/10月1日現在人口×1000である。

13) 出生率は、人口1000人あたりの出生数。平成20年の日本の出生率は8.7‰である。

旧丸亀市はプラスの自然増加率が続いていたが、合併前の平成16年からは増加率が落ち込み、平成21年には -0.4% とマイナスに転じた。旧丸亀市の出生率は平成2年に 10.0% と昭和60年よりも低下したが、その後回復し平成12年に 11.7% とピークに達した。旧丸亀市よりも出生率の低い綾歌町や飯山町と合併したこともあり、合併後の平成17年は 10.0% と低下した。それでも同年の坂出市の出生率(7.5%)よりも 2.5% 上回っていた。一方、平成12年における旧丸亀市の高齢化率は昭和60年時点から坂出市に次いで高かったが、坂出市ほどの上昇はなく、合併前の平成12年は 19.1% と坂出市よりも 4.5% 低い状態にあった。しかし、高齢化率の高い綾歌町と合併したこともあり、平成17年には 21.0% まで上昇した。

旧飯山町は平成17年に合併するまで、平成2年を除きプラスの自然増加率を維持してきた。平成16年の増加率は 2.5% であった。旧飯山町の出生率は平成2年には 7.6% と落ち込んだが、その後回復し平成12年には 9.3% となっていた。昭和60年における旧飯山町の高齢化率は 11.2% と宇多津町よりも低かったが、合併前の平成12年には 17.8% まで上昇した。しかし、それでも坂出市より

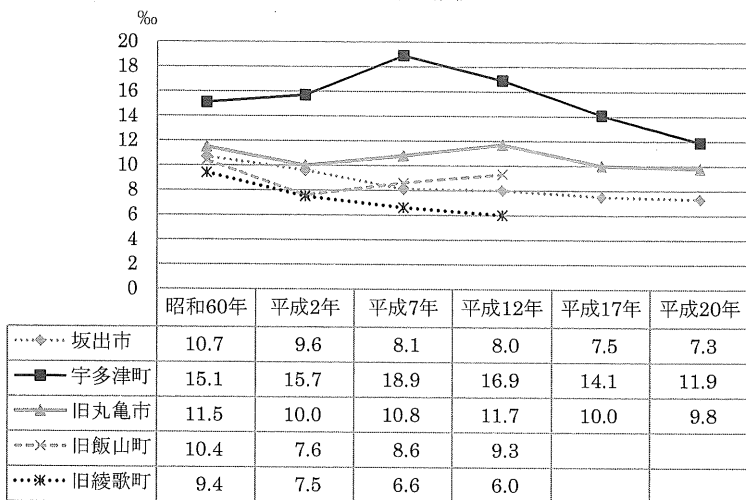
図5 自然増減率の推移



注：香川県人口移動調査報告書により作成。
平成17年からは丸亀市（旧丸亀市，旧飯山町，旧綾歌町が合併）。

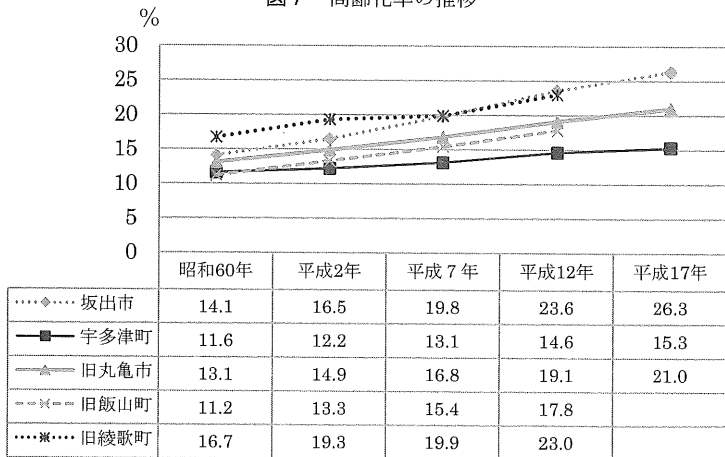
(12) 地方開発と地方都市圏の変容

図6 出生率の推移



注：香川県人口移動調査報告書により作成。
平成17年からは丸亀市（旧丸亀市，旧飯山町，旧綾歌町が合併）

図7 高齢化率の推移

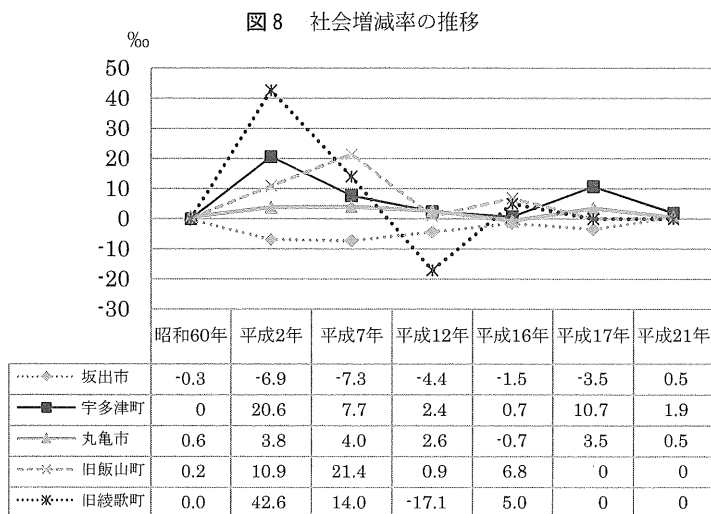


注：総務庁統計局「国勢調査報告」（平成22年は速報）により作成。
平成17年は丸亀市（旧丸亀市，旧飯山町，旧綾歌町が合併）。

も5.8%，旧丸亀市よりも4.5％低い状態にあった。

図8は、坂出都市圏の市と町の社会増減率を示したものである¹⁴⁾。これによれば次のような点が指摘される。坂出市は昭和60年から平成17年まで社会減少が続いている。なかでも瀬戸大橋が開通した後の平成2年，平成7年の社会減少率が－6.9％，－7.3％と特に高くなっている。ただ，平成21年には0.5％と社会増加に転じており，新しい傾向として注目される。

これに対して，宇多津町においては坂出市の動向とは逆に瀬戸大橋開通直後の平成2年に20.6％と著しい社会増加を示し，平成7年以降も社会増加が続いている。旧丸亀市の社会増加率も平成2年に3.8％，平成7年には4.0％と上昇した。旧飯山町においては平成2年に10.9％，平成7年に21.4％と特に高い増加率を示した。



注：「香川県人口移動調査報告書」により作成

14) 社会増減率の計算式は社会増減率（％）＝1年間の社会増減数/10月1日現在人口×1000である。

(14) 地方開発と地方都市圏の変容

以上のごとく、坂出市が高い減少率を示した平成2年と平成7年において宇多津市、旧飯山町、旧丸亀市では逆に高い社会増加率を示している。このことは瀬戸大橋の開通後、坂出市の多くの人口が坂出市周辺の宇多津市、旧飯山町、旧丸亀市へ転出したことを示している。

旧綾歌町では平成2年33.4%、平成7年14.0%と高い増加率を示した。この旧綾歌町の高い社会増加率は坂出市からの転出というよりも、「レオマワールド」で働く人々が広域から転入した結果であると考えられる。しかし、「レオマワールド」が閉鎖された平成12年には-17.1%と激減した。

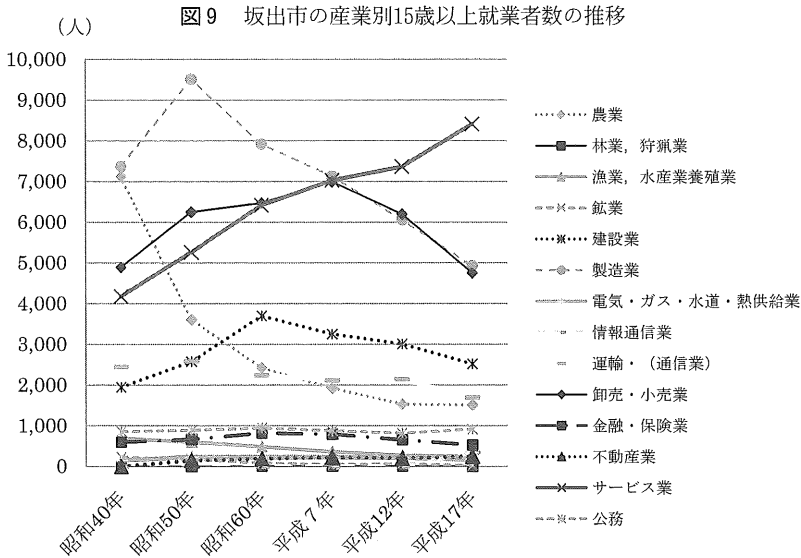
3) 社会減少と産業別就業者の変化

坂出市の社会減少は昭和60年以前からすでに始まっていた。高度経済成長期における番の州企業の生産拡大に伴い坂出市の転入人口は増加した。しかし、オイルショックにより番の州工業地帯の基幹産業である造船業やアルミ製造業は大きな打撃を受け、昭和50年から60年にかけて坂出市の輸送用機械器具製造業と石油・石炭製品製造業の就業者数は急激な減少に転じた¹⁵⁾。こうした製造業減少の傾向は図9にみられるごとく、昭和60年以降も続いている。これら坂出市の製造業就業者の減少はオイルショックと景気の低迷だけが原因ではない。多くの製造業就業者が坂出市周辺の市町へ転出したことも大きく影響している。

坂出市民の製造業就業者は昭和50年以降減少の一途を辿り、ピーク時の昭和50年の9,514人から昭和60年には7,921人となり、平成17年には4,928人にまで減少した。このほか、農業は昭和40年以降、卸売・小売業は平成7年以降、建設業は瀬戸大橋が開通した昭和60年代以降、著しく減少している。こうしたなか、飲食店・宿泊業、医療・福祉、教育・学習支援業、複合サービス業などか

15) 詳細は奥田憲昭 前掲書 13頁。

らなるサービス業は増加し続け、平成12年からは製造業を追い抜き最も多い就業者数となっている¹⁶⁾。

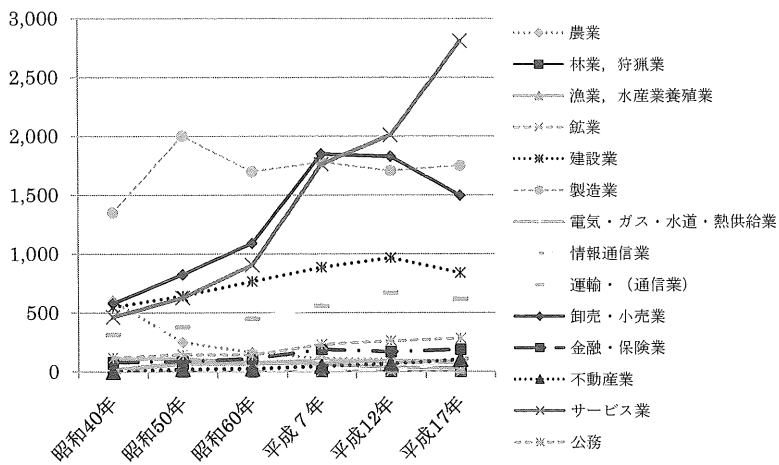


注：総務庁統計局「国勢調査報告」により作成

図10、図11は坂出市に隣接する宇多津町、旧飯山町の産業別15歳以上就業者数の推移を示したものである。宇多津町においては塩業が主要産業であったこともあり、昭和40年時点において既に製造業従事者が最も多くなっていた。そして、番の州工業地帯が造成された昭和40年から50年にかけて製造業従事者がさらに増加した。昭和60年に300人ほど減少したものの、その後はほぼ横ばい状態を維持している。一方、平成60年以降は新都市が完成して住民が増加する

16) 平成15年までのサービス業は平成17年から医療・福祉、教育・学習支援、複合サービス業、サービス業（他に分類されないもの）に分けて独立して表示されるようになった。ここでは平成17年の統計を平成15年までの統計表に合わせて集計している。

図10 宇多津町の産業別15歳以上就業者数の推移

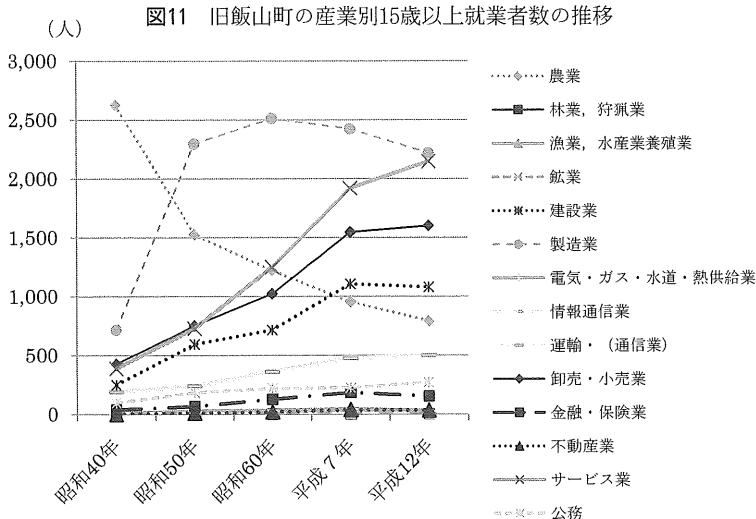


注：総務庁統計局「国勢調査報告」により作成

のに伴いサービス業就業者が著しく増加している。

旧飯山町の場合、昭和40年には農業就業者が圧倒的多数を占めていた。しかし、昭和40年から昭和50年にかけて製造業就業者が急増し、農業従事者が急減した。農業従事者は、昭和40年2,625人、昭和50年1,527人、昭和60年1,220人、平成7年954人、平成12年791人となっている。製造業就業者は昭和60年にピークを迎えるが、昭和60年の飯山町における製造業従事者は2,513人となっていた。そして、このうちの62.2%にあたる1,564人が県内他市町村で従業していた。旧飯山町には川崎重工の飯山団地や秋常団地が建設されたことから、増加した製造業就業者の多くは坂出市で働く就業者であったと考えられる。昭和60年をピークに製造業就業者は減少傾向となるが、旧丸亀市と合併する前の平成12年においても2,219人が製造業に従事していた。このほか旧飯山町においても、サービス業就業者と卸売・小売業就業者が急増していった。特にサービス業の増加は著しく、昭和12年におけるサービス業は2,147人となり、製造業就

業者とほぼ同数となっている。こうした傾向は旧飯山町が近郊農村地から郊外住宅地に大きく変容していることを示している。



注：総務庁統計局「国勢調査報告」により作成

4) 昼間人口の推移

坂出都市圏の実態とその変化を明らかにするために坂出市を中心とした昼間人口をみておくこととする¹⁷⁾。表1は昭和60年以降の坂出市への流入人口の推移を坂出市に近接する市町別に示したものである。坂出市の流入人口(合計)は昭和60年から平成7年まで増加してきた¹⁸⁾。しかし、平成7年の16,905人を

17) 昼間人口は通勤・通学のほかに観光などによる流入がある。瀬戸大橋開通とともに観光客の動向については機会を改めて取り上げることとし、ここでは主に通勤者の動向を取り上げる。

18) 昭和40年から昭和60年までの流入人口は『現代地方都市論』において示している。これによれば昭和40年には6,898人であったが、番の州工業地帯が稼働してから増加し、昭和45年10,888人、昭和50年14,696人、昭和55年13,370人、昭和60年14,375人と推移していた。

(18) 地方開発と地方都市圏の変容

表1 坂出市への流入人口の推移

単位：人

	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
高松市	1,385	1,803	2,013	2,009	2,049
旧丸亀市	3,091	2,668	3,608	3,742	6,674
善通寺市	655	660	839	876	858
国分寺町	705	611	1,010	997	1,048
旧綾歌町	675	541	750	780	—
旧飯山町	2,229	1,769	2,350	2,162	—
宇多津町	1,926	1,741	2,077	2,103	2,155
多度津町	573	493	692	706	709
倉敷市	40	225	192	181	156
岡山市	—	68	64	44	47
その他	3,096	3,997	3,310	3,220	3,119
合計	14,375	14,576	16,905	16,820	16,815

注：総務庁統計局「国勢調査報告」により作成
流入人口は15歳以上就業者と15歳以上通学者の合計

ピークにその後は僅少ながら減少している。

合併前の流入人口を市町村別にみると、坂出市への流入が最も多いのは旧丸亀市であり、次いで旧飯山町、宇多津町の順になっている。合併前の旧丸亀市・旧飯山町・旧綾歌町の流入人口を合計して丸亀市とし、その人口推移をみると、昭和60年5,995人、平成2年4,978人、平成7年6,708人、平成12年6,684

-
- 19)『現代地方都市論』においては産業別流入・流出人口が掲載されているが、平成2年からの国勢調査報告では市町村別の産業別流入・流出人口は掲載されなくなった。平成60年の産業別流入人口では、製造業が4,776人と最も多く、次いでサービス業の2,132人、建設業の1,766人、卸売・小売業の1,545人、運輸・通信業の1,301人の順となっていた。

人、平成17年6,674人となっている。平成2年が大きく減少しているのは、瀬戸大橋が開通後、瀬戸大橋建設に従事していた建設業関係者の流入が急減したためであると考えられる¹⁹⁾。平成7年がピークであったが、それ以降も6,600人以上の人口が丸亀市から流入している。平成17年の丸亀市からの流入人口6,674人の15歳以上就業者と15歳以上通学者の内訳は、就業者が6,058人、通学者が616人で、就業者が90.8%となっている。平成17年3月に丸亀市と合併した旧飯山町の場合、平成12年の国勢調査までは昭和60年2,229人、平成2年1,769人、平成7年2,350人、平成12年2,162人といずれの調査年においても宇多津市を上回る人口が坂出市に流入していた。

宇多津町からの流入人口は昭和60年1,926人、平成2年1,741人、平成7年2,077人、平成12年2,103人、平成17年2,155人と一貫して増加傾向にある。平成17年における宇多津町からの流入人口2,155人の内訳は、15歳以上就業者が2,007人、15歳以上通学者が148人であり、就業者の比率は93.1%と丸亀市よりも高くなっている。

このように昼間は坂出市に丸亀市、宇多津市、旧飯山町から多くの人口が流入しており、坂出市を中心とした坂出都市圏が形成されている。旧飯山町が旧丸亀市と合併したとはいえ、宇多津市・旧丸亀市・旧飯山町は坂出都市圏として坂出市と強く結び付いており、その結びつきは現在まで続いている²⁰⁾。瀬戸大橋が開通した直後の平成2年頃には瀬戸大橋工事が終わり、坂出都市圏の吸引力は低下したものの、平成7年には再び増加し、その後横這い状態となっている。

20) もともと旧飯山町及び宇多津町は1942年に坂出町が市制を施行して坂出市になるまでは同じ綾歌郡に属していた。そうしたことから坂出市・飯山町・宇多津町は歴史的にも強い一体性をもっている。

(20) 地方開発と地方都市圏の変容

一方、坂出市は高松市や丸亀市へ人口を流出している(表2)。なかでも県庁所在都市である高松市への流出は瀬戸大橋の開通後増加し、平成7年には4,435人まで増加した。これは、瀬戸大橋の開通後、高松－岡山間を1時間ごとに発着する快速マリンライナーが走行するようになり、高松－坂出間はノンストップで約15分に短縮されたことが大きく影響している。こうしたことから坂出市は独自の坂出都市圏を形成しながらも、より広域な高松都市圏との結びつきを強めるようになってきている。

丸亀市、宇多津町への流出も瀬戸大橋開通後増加してきている。これは、瀬戸大橋の開通に伴い片側2車線の国道11号線が開通し、車による移動時間が短縮されたことや宇多津町に新都市が形成され坂出市から宇多津町の商業施設な

表2 坂出市からの流出人口

単位：人

	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
高松市	3,795	4,162	4,435	4,303	4,030
丸亀市	2,156	2,441	2,486	2,462	2,940
善通寺市	367	401	381	408	429
国分寺町	210	314	372	365	336
旧綾歌町	53	122	149	139	—
旧飯山町	516	609	540	433	—
宇多津町	816	1,197	1,408	1,423	1,493
多度津町	205	277	257	290	293
倉敷市	22	56	105	114	66
岡山市	—	108	201	195	185
その他	676	918	1,170	1,239	1,367
合計	8,816	10,605	11,504	11,371	11,139

注：総務庁統計局「国勢調査報告」により作成
流入人口は15歳以上就業者と15歳以上通学者の合計

どに勤務する人が増加したことによるものと考えられる。

表3は昼間人口比率の推移を示したものである。これによれば、坂出市は昼間人口が多く、平成2年には一時低下したものの、平成7年109.1、平成12年109.6、平成17年110.3と上昇している。一方、丸亀市は平成2年をピークに下がり続け、飯山町・綾歌町との合併により平成17年には94.6と夜間人口のほうが多くなっている。旧飯山町においても昭和60年以降昼間人口比率は下がり続けている。なお、香川県の県庁所在都市である高松市の昼夜間人口比率は、香川県において最も高いが、平成17年には坂出市との差はわずか0.8%に縮小している。

表3 昼間人口比率の推移

単位：％

	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
坂出市	108.5	107.3	109.1	109.6	110.3
宇多津町	85.4	97.7	103.6	105.5	105.3
丸亀市	105.5	106.5	103.8	102.2	94.6
旧飯山町	82.5	79.8	75.3	74.1	—
旧綾歌町	76.2	78.7	80.1	76.4	—
高松市	112.6	112.3	113.0	112.9	111.1

注：総務庁統計局「国勢調査報告」により作成
 昼夜間人口比率＝昼間人口/夜間人口×100

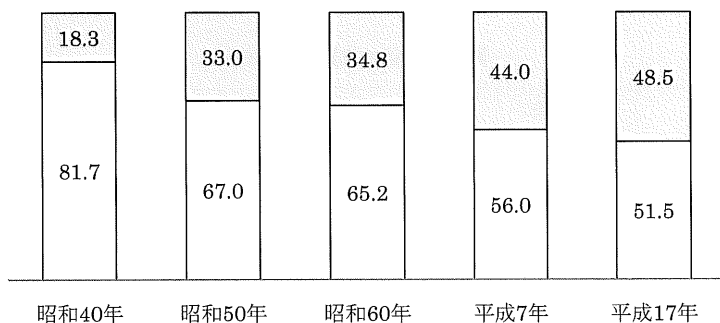
図12は坂出市で就業するもののうち坂出市に常住する人口と坂出市以外に常住する人口の比率を示したものである。これによれば、坂出市就業人口のうちの坂出市に常住する人口の比率は昭和40年段階では81.7%を占めていたが、番の州工業地帯が形成されてからは坂出市以外に常住する人口の比率が増え、昭和50年においては33.0%，昭和60年には34.8%を占めた。さらに瀬戸大橋の開通後も坂出市以外に常住する人口の比率は増大し、平成17年には48.5%と5割

(22) 地方開発と地方都市圏の変容

近くを占めるようになった。すなわち、平成17年には、坂出市で働く人々の約半分以上が坂出市以外の人々によって占められたのである。このことは、坂出市で働き給与を得ている人たちの半分以上が坂出市以外の市町に居住し、居住地の自治体に住民税を納付するようになったことを意味している。このことは、坂出市の税収に大きな影響を及ぼしているものと考えられる。

図12 坂出市就業人口のうちの坂出市常住人口比率

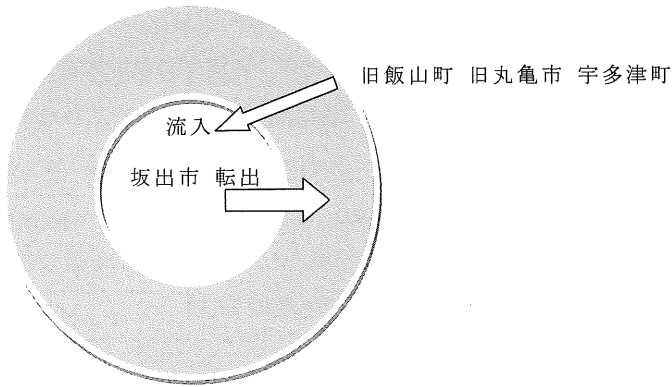
□坂出市に常住 □坂出市以外に常住



注：総務庁統計局「国勢調査報告」により作成

以上、国勢調査報告や香川県人口移動調査報告などにに基づき、主として昭和60年以降の坂出都市圏の変容について分析してきた。その結果、番の州工業地帯の形成後、自動車の大衆化に伴い多くの坂出市民が旧飯山町、旧丸亀市、宇多津町に転出するようになった。瀬戸大橋開通後もこうした坂出市民の転出傾向は続き、坂出市の空洞化現象が顕著となる一方、屋間においては坂出市内で勤務するために周辺市町村からの流入が増大し続けた。

坂出市の空洞化現象



3. 坂出都市圏変化の原因：プル要因とプッシュ要因

さて、こうした坂出都市圏の変化はなぜ生じたのであろうか。人間の居住地の移動には、必ずプル要因とプッシュ要因が働く。坂出市周辺の市町が坂出市民を惹きつけるプル要因は何であらうか。

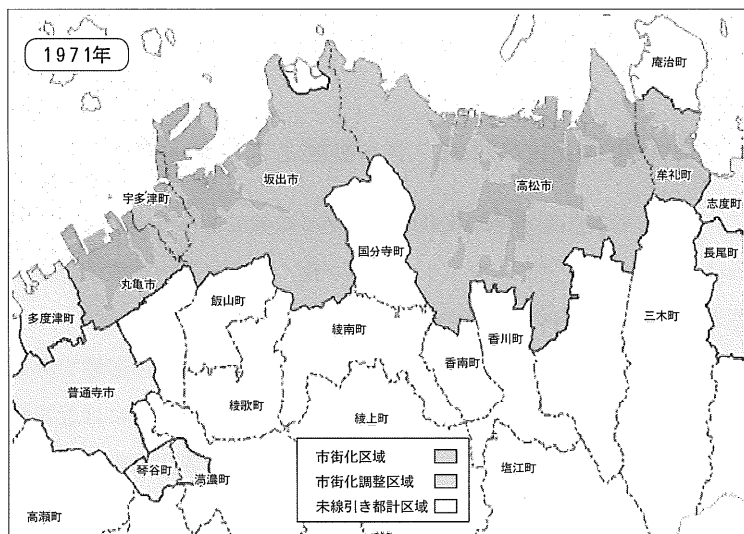
その第一の要因としてあげられるのは、香川県の都市計画の影響である。地方都市である坂出市は都市的市街地だけではなく、市街地周辺には近郊農村地域が広がっている。旧飯山町も坂出市の近郊農村地域も坂出の中心地である坂出駅からの自動車による時間的距離はあまり変わらない。にもかかわらず坂出市民が坂出市内の近郊農村地域ではなく、旧飯山町や旧丸亀市の近郊農村地域へ転出した原因としてそれぞれの市町の都市計画の違いがあったのである。

都市計画の在り方は各市町村の意向を聞きながら県が決定することになっている。香川県が1971年（昭和46年）に定めた都市計画（図13）では、坂出市のほぼ全域が市街化地域と市街化調整地域の線引きを行う都市計画区域となっていた。これに対して旧飯山町は規制のない都市計画区域外地域となっていた。都市計画で指定された市街化調整区域は農地を保全する地域であり、市街化調

(24) 地方開発と地方都市圏の変容

整区域内では販売のための宅地建設は原則として禁止されている。したがって坂出市で住宅を建設しようと思えば、地価の高い市街化区域の土地を取得して住宅建設するしか方途がなかったのである²¹⁾。丸亀市も都市計画区域を定めたが坂出市とは異なりその区域は狭く、市内の南部農村地域に広い都市計画外地域を残していた。その結果、丸亀市においては都市計画外地域の安い農地が宅地化され、活発な住宅販売が行われた。

図13 1971年の香川県都市計画



出所：小島重俊「香川県都市計画の見直し」

以上のように1971年に制定された第1次都市計画は、住宅購入を求める坂出市民を地価の安い周辺市町に引き寄せる効果をもった。この1971年に制定された都市計画は29年間続き、2000年ようやく見直されることとなった。しか

21) 飯山町の地価は昭和60年時点において坂出市の三分の一程度であった。『現代地方都市論』57ページ。

し、2000年に見直された第2次香川県都市計画でも丸亀市の都市計画区域は見直されず、南部の農村地域は都市計画外地域のままであった。このため坂出市が抗議して再度の見直しを強く要請したこともあり、2004年に再見直しが実施された。そして新しい第3次香川県都市計画では都市計画区域を拡大再編するとともに、市街化区域・市街化調整区域といった線引きは廃止することとなった。

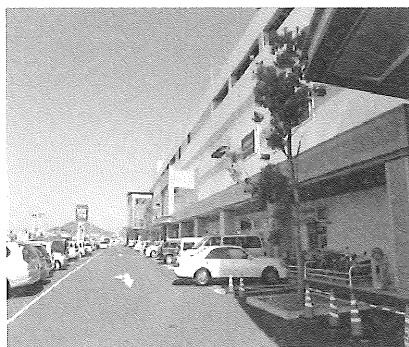
都市計画のほかにプル要因としてあげられるのは、瀬戸大橋開通に伴う国道11号線の新設とそれに接続する幹線道路の整備である。瀬戸大橋の開通に合わせて香川県側のいくつかの道路網が整備された。第1は高松・松山を結ぶ高速道路（四国横断自動車道）の整備であり、第2はその高速道路と連結する国道11号線の整備、第3は瀬戸内海側海岸線を走り坂出北IC・番の州工業地帯・宇多津町新都市地区を結ぶ浜街道の整備、第4は飯山町の国道438号線と国道11号線の接続整備、第5は国道438号線から浜街道に接続する県道191号線・194号線の整備である。これらの道路網の整備により旧飯山町・丸亀市南部の新興住宅地・宇多津新都市などから番の州工業地帯や坂出港湾地域への通勤時間が短縮されることとなった。

さらに第3のプル要因は、大型ショッピングセンターの立地である。地方都

宅地化される丸亀市の農地



丸亀市の大型ショッピングセンター



(26) 地方開発と地方都市圏の変容

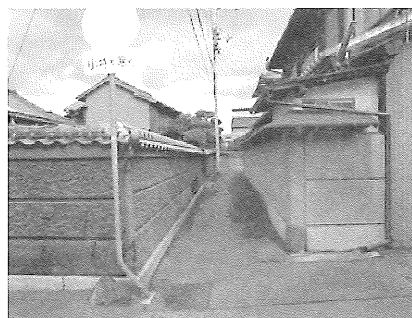
市においては大都市以上に自家用車が生活の足になっている。無料で駐車できる広い駐車場を備え、衣・食・住にかかわる日用品が豊富に揃っている大型ショッピングセンターは地方都市の消費者にとっては大きな魅力である。坂出都市圏においても郊外地域の拡大に伴う大型ショッピングセンターの立地がさらに新しい住民を惹きつける要因になっているのである。瀬戸大橋開通後、県外に本社を持つ大型ショッピングセンターが宅地化の進む丸亀市郊外に2か所、宇多津新都市に1か所出店した。

坂出市民が旧飯山町・宇多津町・旧丸亀市に転出するのはプル要因だけでなくプッシュ要因も大きく作用している。坂出市のプッシュ要因としては戦前からの中心市街地の都市構造があげられる。坂出市はもともと塩田の町として発達してきた。終戦直前の爆撃を受けなかったこともあり、中心部の市街地には立派な外壁を持つ地主層の一戸建て住宅と庶民層の住む長屋が密集していた。また、中心部の住宅街は道路が狭くて車が入りにくい街路が多い。こうした都市構造のなかで若い世代がマイホームを持とうとした場合の主な選択肢は、中心部に建設されたマンションに住むか、市内の塩田跡地の造成地に建設された高い一戸建て住宅を購入するか、市外の地価の安い都市計画区域以外地域の一戸建て住宅を購入するかのいずれかである。こうした選択肢のなかで、自家用

都市計画外地域の宅地（飯山町）



坂出市内の路地裏



車で通勤する坂出市の子育て世代の多くが市外の地価の安い都市計画区域以外地域の一戸建て住宅を購入して坂出市から転出したのである。

自動車が大衆化するまでに坂出市の工場労働者は自転車通勤していた。工場労働者が列をなして港に向かい自転車通勤する風景は坂出市の名物となり、しばしばマスコミに取り上げられた。しかし、番の州工業地帯や臨海工業地区が拡大した昭和45年以降は通勤距離が長くなるとともに自動車の大衆化によって工業地帯における朝の通勤風景は自転車通勤から自動車通勤に変化した。自動車通勤する通勤者には過密で道路が狭く、駐車場がとれない坂出市の都市構造は郊外への転出を促すプッシュ要因として大きく作用したのである。

4. まとめ

瀬戸内海の海上を列車が走り、自動車が走る。この夢に満ちた瀬戸大橋の開通に市民は歓喜した。「夢無限 海橋のまち坂出」といった標語は市民の瀬戸大橋開通による坂出市発展への期待を物語っていた。しかし、瀬戸大橋開通から20年過ぎた今日、坂出市民の夢は破れ、坂出市は「夢破れて海橋あり」といった現実直面している。本論文における人口分析結果は、瀬戸大橋開通時には予想されなかった事態が進行したことを明らかにした。その要点をまとめると以下のとおりである。

- ・瀬戸大橋開通後、坂出市の人口は著しく減少した。
- ・宇多津町、旧丸亀市、旧飯山町といった坂出市周辺市町は人口増加が続いた。
- ・瀬戸大橋開通後、若い世代を中心に多くの市民が周辺市町へ転出した。
- ・その結果、坂出市の少子高齢化が著しく進行した。
- ・坂出市民の転出により坂出市の製造業就業者の減少が続いた。
- ・転出により夜間人口は減少したが、流入により昼間人口の増加が続いた。
- ・坂出市就業人口のうち坂出市常住人口の占める比率は5割程度にまで低下

(28) 地方開発と地方都市圏の変容

した。

- ・一連の人口変化は坂出都市圏を拡大し、坂出市の空洞化を進行させた。
- ・坂出市周辺市町が坂出市民を惹きつける要因としては、香川県都市計画、国道11号線の新設など幹線道路の整備、大型ショッピングセンターの立地があげられる。
- ・坂出市民を周辺市町へ押し出すプッシュ要因として、駐車場が取れない密集した住宅地、自動車が通れない狭い中心市街地の道路、高い地価があげられる。

若い子育て世代の多くが坂出市から転出した結果、坂出市は急速な人口減少と少子高齢化に遭遇することとなった。この人口減少と少子高齢化が坂出市中心市街地に与えた影響については機会を改めて詳細に論じることとしたい²²⁾。

22) 本論文は平成22年度科研費による「瀬戸大橋が地方都市に及ぼした影響に関する時間的比較研究」の一部をまとめたものである。